

中村武羅夫

小川未明氏



小川未明氏



木綿縞の着物に、紺緞の羽織を着られた、極めて質素な風采で、顔の色も黒い。下腭骨が張って、度の強い近眼鏡の中から、眼は鋭く光った。総ての文士にくらべて、一体に骨々した体格で、指や手首も一度は労働したこともあると言えるぐらい太い。

自分は未明氏に会って、此の人があの空想に満ちた白雲の行衛を見送って泣いたり、秋の凋落を悲しんで涙を落したりする、センチメンタルな作品を書かれると云うことに驚いた。自分の初めて会ったのは此春のことで、

未明氏も然うした従来の作品に嫌らなくて、何か新らしい或る物を求めようと努力して、煩悶して居られる未明氏の過渡期であつた。で、自ら話されることも総べて文芸上の話——重に自分の求めて未だ求め得られない煩悶や、その他現代の文士の能度に対する不平不満で、話は持ち切つて居た。声は掠れ気味の錆のある方で、話をする時に少しあせる、気味がある。眼が絶えず、隙もなく働いて、話し振りから、態度から、如何にもせかせかして、心の中にゆとりと云うものがない、太い所がない、どつしりとした重い所がない。じつと坐つた時でも身体の何

所かが必らず働いて居る。自分は未明氏に今少し余裕があつて欲しいと思つた。

未明氏は真面目な人である。思い込んだ事は只一途にその事のみを思つて、他の事を考える余裕がない。未明氏は悶える人である。悩む人である。考える人ではない。で、とにかく従来の自分の作品に嫌らないで煩悶するが、嫌らないで単に煩悶するのみで、如何なる物を求めて満足したなら好いかと云うことを考える余裕がない。その煩悶は真面目であろう。その苦痛は切実であろうが、恐らくは只真面目な煩悶切実な苦痛として終る煩悶苦痛

で、その煩悶苦痛の中より何物も生み得ない人ではあるまいか。若し、煩悶の為めの煩悶苦痛の為めの苦痛としたならば、吾れと自ら進んで受けるその煩悶苦痛に、何の意義、何の価値がある。人は何物をか求めん為めに、悶えもする。何物をか握らんが為めに苦みもする。何等かの響きを聞かんが為めに悩みもする。未明氏は悶え悩み苦みながらも、その悶え悩み苦みの中より生れ出るべき或物を考えて居ない。で、極端に云ったならば、徒らなる煩悶、徒らなる苦痛、徒らなる悩みと云うことが出来よう。







日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館